

自分を見つめる美術教育

前香港日本人学校中学部 教諭

三重県志摩市立磯部中学校 教諭 大 主 孔 明

キーワード：美術教育、言語活動、現地校交流

1. はじめに

香港日本人学校中学部は、香港島北角にあり、一番賑やかな街の銅鑼湾にほど近い山間部に位置している。周りには多くの学校が立ち並び静かなところであり、隣のChinese International Schoolと共有ではあるがグラウンドも使え、学びの環境としては申し分ない環境にある。

治安が良いため通学にスクールバスもあるが、学校に通う半数の生徒は「自主登下校」をしていてスクールバスを使っていない。部活動の後はスクールバスに乗らず下校する生徒が多く、一部の生徒はそのまま塾に行き夜遅くまで学習している現状がある。学校全体に落ち着きがあり、学習に対する意欲は非常に高い。お互いにいろんなことをオープンにして話ができて、勉強することや、真面目にやることをお互いに認め合える雰囲気のある学校である。

2. 香港の美術教育の現状 ～桂華山中との研修の中から～

香港日本人学校中学部では、近くにある現地校と研修を持つ機会があり、授業をみせていただいた。お互いに授業を見合い、その後職員同士で研修会を行う形を2年間続けた。また、2年目には美術の授業を見学する機会があり、中学校1年生の立方体に陰影をつける授業を見た。国内でも基本的な技能の習得として取り組むことがある課題であるが、ここでは実物を見ずに、教員の描いた立方体の作品を見て、細かい陰影の段階が指示される中で、そのまま陰影を描くことが授業の主目的とされていて、スキルの習得が中心であるように感じた。そのことと、空想表現や抽象表現が多く展示されていることは繋がりを感じることができる。

このように香港の学校では、学校内や廊下などに生徒の制作した絵画や立体作品が数多く展示されていることが多く、空想表現や抽象表現が多く、風景画や静物画などを見ることはあまりなかった。

Art Schoolは街中で数多く見ることができる。作品などが展示してあるが、それらも多くは模倣などを中心として、描き方を習得するためのものが多いのが特徴的である。そういったことから感じたのは、香港では描き方を学びスキルを上げたいうえで、自分のイメージを形につなげることが、美術表現の中心にあるということである。

また、2014年に起こった大規模なデモでは多くの学生が参加したが、その時に象徴的に扱われた黄色い雨傘は、いろんな形でアート作品となっている。それだけアートが生活に密着していることが、香港で暮らしている中で感じることができる。街中で見るアート作品も多く、季節に応じて新しいものが設置し続けられている。

3. 香港日本人学校中学部の生徒について

香港で暮らす生徒の多くが、親や保護者からの愛情を沢山かけてもらっていることが多い。また、狭いエリアに多くの日本人の家庭が暮らすため、日頃から家同士の付き合いも多く、子どもたちは大人とも付き合い、子どもの日常的な言動は保護者の中で共有されている。そのこともあり、沢山の目で見守られて、比較的穏やかに暮らしている子どもが多いのが特徴的である。

また、転出入が多いが、それは当たり前のようになっていて、編入してきた生徒に対してそれほどかまえることもなくすぐに受け入れることができるし、入ってきた子も早くなじめることが多い。しかし、仲良くなった友だちが次々に去っていくので、学期が変わると、表情を曇らせている子どもが気になるということもよくある。

先にも書いたように、学習に対しては真面目で非常に熱心である。それは、いわゆる5教科だけでなく、美術

などの技能教科についても同様で、点数にこだわりすぎる部分もあるが、少しでもいい評価を得られるようにとよく努力している。

塾通いは盛んで、子どもたちはとても忙しい毎日を送っていて帰宅時間が毎日11時を過ぎるという子どももめずらしくない。疲れていて授業に集中できなくなることもあるが、そんな中でもよく努力する子どもが多い。

そんな比較的安定した中で過ごしている子どもたちであるが、様々な葛藤も当然ある。大人にしっかり見てもらっていることは大きな期待によるプレッシャーになり、大人の世界に近いゆえにそこに巻き込まれがちな子どももいる。そうした心の傷は日常の生活の中で浮かび上がってくる。そんなこの年代が当然持っている気持ちの揺れや自我の芽生えに伴う苦しみ、自分の仲や友だちの関係の中での葛藤などを、少しでも表現活動の中で見つめる時間をもつことで解決の糸口を見つけないか、表現によって発散できないか、と考えて美術の創作活動を行ってきている。そのためには、美術の表現のスキルを習得するとともに、言語活動を取り入れながら、心の中のものを言語化することも大切にするようにしてきた。

4. 言語活動と創作活動

(1) 5分間鑑賞

表現活動につながる言語活動として、鑑賞を継続的に行っている。授業の始まりに毎時間5分間鑑賞をグループで行う。これは、まずグループで1冊、授業の前に教室に準備してある主に絵画作品の画集を選ぶ。その中から更に作品を1つ選び、4人ほどのグループで一緒に鑑賞し、思ったことや考えたこと話題に上ったことなどを文章にする取り組みである。初めはあまりねらいもなく作品を選んでいるが、続けていくうちに子どもたちは今の自分の課題に応じたものや、自分の気に入った作家を選ぶようになる。ゴッホもルノワールも知らなかった子どもたちが、コロアの作品集を持ってきてグループの子どもに勧めている姿などはほほえましいものがある。そんな中で気づいたことを語りだすと、一人で作品を見ていても気づかないことに気付けるようになる。例えば女の人が描かれていれば、その女性が落ち込んでいるのか、それとも元気な様子なのか、などと想像力を働かせるようになってくる。すると、空の色やそこに出てくる小物にまで気持ちが行くようになり、より深く作品を読み取ろうとし、時には楽しもうとする。作者の心情にも気持ちを馳せる事も出てくる。

また、色づかいについても、空ならばただ青で塗ってある、というのではなくいろんな色が塗ってあることにも気づくようになる。筆のタッチに気づく子どもも出てくる。以下の例のように、それらのことは直接表現力を上げるまで至らなくても、描くということについて、それまでとは違った思いを持てるようになってくると考えている。

【資料①】 5分間鑑賞から

作者：フェルメール 作品名：「水差しを手にした若い女」

- すごく暗い顔つきをしていた。水差しを手にしていたけど、何をするのか不思議に思った。壁にひびが入っていて建物が古そうだなと思った。
- 防災着みたいなものを着ている女性が窓の外を少しうらやましそうに眺めている。笑顔で。もしかしたらこの人は外に出られないのかもしれない。
- 壁に飾られている絵と水差しの質が本物みたいだなと思いました。窓から日が差していて影がちゃんとあつてこまかいなと思いました。

作者：ターナー 作品名：「国会議事堂の炎上」

- ターナーは自分の国の政治に不満やいら立ちがあつて、国会議事堂の炎上の絵を描いたのだと思う。
- 炎上しているのに、なぜかきれいに見える。ここがどこの国なのかはわからないけれど、国民の人はどんな気持ちなのか気になる。
- 政治がうまくいってなく悲しい気持ちが続き、国会議事堂が燃えたのを記念に描いたみたい。タイトルも硬い感じで、他の絵と比べると違うと思った。

○めちゃくちゃリアル。火災が目立っている。そこまでさみしさも悲しさも感じない。

○炎が激しくて何が燃えているのかわからない。映画でよくあるワンシーンを絵にしたらこんな感じになるのかと思う。あたり一面が赤く染まり炎の激しさがわかる。

(2) 言語活動と作品のつながり ～作文から作品制作へ～

今回1年生と2年生の3学期の授業において、空想画の制作を行った。1年生はモダンテクニックを学びながら、今の自分を見つめて「私を描く」という作品に取り組み、2年生は香港になじみの深い龍を作品の中にコラージュして入れる、「ドラゴンと私」という作品を制作した。どちらの学年も作品を制作する前に、自分について見つめる作文を書くところから始めた。しかしいきなり書くことは難しいので、教師自身のこれまでの経験してきたことを話し、それが今の自分を創ってきたということを話した。約30分の話であったが、ほとんどの子どもが食い入るように話を聴いた。そんなこともあり、作文に普段言いたくても言えないようなことを書くことができた子どもが何人も出てきた。もやもやと頭の中に合ったものを言語化することで、気持ちもすっきりし、作品のイメージもより具体的になり、その後の作品制作はスムーズに進めることができた。逆に作文でつまづかせてしまった子どもは、何を表現すればいいのかわからず、イメージが固まらず、ないまま制作を進めざるを得ない状況となってしまった。もっと自分自身のことをしっかり考え、なんでもやってみるという気持ちにさせたりすることができたら、と課題を感じた。

書ききることができた子どもは作品制作後の説明シートにも、その思いを書いている。言語活動が充実していけば、その子の作品も変化し充実したものになっている。何人かの作品をここに載せておきたい。

○生徒A



生徒B 作品

作文の概要

小学校5年生の時にいじめをうけた。友だちがイヤなことをされていたのでかばったら自分も攻撃された。二人で悪口を言われながら雨の中泣きながら帰ったことを覚えている。両親が忙しい中、おじいちゃん、おばあちゃんに育ててもらった。わがままを聞いてくれたことを思い出す。

【作品制作後の作品説明シート】

月が好きなので、暗い背景に黄色の月を目立たせるように描いたのが一番上手にできたところだと思います。電車のコラージュは、色々物を詰め込んでいる感じにして、そこに心をつけて自分を表現しました。未来に向かって走っているようにしました。線路を全部かかなかったのは、過去を振り返らないようにしたいという私の小さな思いでそうしました。月の横に小さく星を描いたのは、いつまでもいつまでも輝いていたいからです。

○生徒B



作文の概要

4年生まではまとめ役が好きだった。5年生で転校をして、そこでいじめにあった。その時から人の目を気にするようになった。今も自分は人に合わせてばかりいる。でも、中学に入ってから頑張ろうと思ってきた。部活で部長になったのも大きなこと。最近になって自己主張できるようになってきた。

【作品制作後の作品説明シート】

何か悩んだとき、泣きたいとき、もう何もやりたくないと思ったとき、気晴らしにどこかへ連れて行ってくれる龍を思い浮かべました。大切な友だちで家族のような存在という設定です。きれいな夕焼けを見せてくれたワンシーンです。顔は少し怖いけど、心は優しい龍をイメージしました。ここにいる女の子の顔が見えていないのは、この女のこが泣いているからです。でも、この龍は気づかないふりをしてきている、という図です。

生徒C

作文の概要

僕は外国人と日本人の母親のもとに生まれた。そのことに誇りを持っている。5年生の時に家の中で大きな事件が起こった。そのことで家の中は大変なことになった。沢山泣いた。そして人を信じられなくなった。自分を隠すようになった。でも弟はきつともっと辛かったと思う。1日1日頑張って、家族みんなが頑張って、ある時友だちに悩みを初めて聞いてもらった。二人はしっかり聞いてくれてすごく嬉しかった。家のことは少しずついい方向に向かっている。そして大変な中でも母は僕になんでも与えてくれる。僕は自分を幸せだと思っている。だけど、一人になりたい時もあるのが今の僕です。

【作品制作後の作品説明シート】

いろいろな事があったことを伝えたくて沢山の色を使いました。自分を表現するのは難しかったけど、うまく伝わるように頑張って描きました。この絵は描いているうちにどんどんアイデアが出てきて、とても描きやすかったです。楽しかったこと、悔しかったことを絵にすることで、うまく自分を表現できました。この先、辛いことがあっても、乗り越えていこうと思って、真ん中にきれいな色を使いました。

5. まとめとして

作品制作の前と作品制作後では、少しずつであるが書くことの内容が変化していることが見て取れる。ここにあげた子どもたちは表現活動を通して前を向き、先に進もうとしていることが顕著にわかる子どもたちである。決して美術の授業の中だけでそうなるわけではないが、日常のいろんなことの積み重ねが、子どもたちには影響して、前を向くこともあればうつむいてしまうこともある。それらを細かくとらえながら作品制作をすることは、プラスに働くことと考えている。

私は美術教師として、在外派遣に手を挙げたときに考えたことは、「どこの国に住む子どもであっても、表現する喜びを通して前を向かせよう、生きる力をつけよう」ということであった。どこで暮らす子どもも、大人の影響を受けながら生活する。生活環境に左右される。仲間の中で喜び苦しみ泣き笑いしながら成長する。そんな

子どもの一助となれないかと思い在外へやってきた。ただきれいな作品を制作するのではなく、そのために週に1時間、美術の時間に表現することを通して、自分を見つめることができたと思う。言語活動を美術の活動の中に今まで以上に取り入れてみた。将来にわたって通用する「生きる力」を育むために、日本でも世界の国のどこでも、美術教育にできることはまだまだあると思っている。